



しゅごキャラ！二次創作

# 帰る場所があるから

はなび

イクあむで結婚して数年が経って仕事が忙しくてなかなか会えない

『今日、帰れそうにない』

携帯のメールボックスを開けば、ただひと言。それだけ書かれていた、夫からのメール。ぱたん、と携帯を閉じて、亜夢は幾斗のために用意していた食事を片づけ始める。

ヴァイオリニストとして幾斗が成功し、世界中を飛び回ること。それは長年の幾斗の夢であったし、そういうふう活躍している幾斗がとでも輝いていて。亜夢も、もちろん嬉しかったのだが。

亜夢が16歳のときに子供ができて、そのまま結婚して。当時音大生だった幾斗と、一緒に暮らすようになった。

「……もっと早く、連絡すればいいのに」

もう間もなく明日にさしかかろうとしている壁の時計を見ながら、ぼそ、と亜夢は漏らした。幾斗のために食事を用意しておくことも、待っている必要もなかったのに。子供が寝たときに一緒に寝ておけば、こんなにも寂しくなることはなかったのに。

もう2年近く、夫の顔を見ていない。いや、間接的に活躍している幾斗の姿は、雑誌やテレビで見た。でも、直接会って会話をしたい。どんな些細なことでも、言葉で触れ合いたい。

昼間、亜夢が仕事に出ているときに着替えを取りに帰ってきて、亜夢が仕事から帰ってくる前に、幾斗もまた仕事に出かける。そんなすれ違いの生活を、もう2年も繰り返しているのだ。

結婚したばかりのことを思うと、途端に寂しくなる。ずっと、幾斗がそばにいてくれたことを思うと。胸が、苦しくなる。

「……」

不意に、涙が頬を伝った。泣きたいわけではないのに。幾斗は、亜夢のために、家族のために仕事を頑張ってくれている。わかっているから、今まで頑張ってくれたのに。

この突如押し寄せた不安は、一体どこから来たのだろうか。ツラくて、寂しくて。拭っても乾かない涙は、どうすればいいのか。

「……お母さん？」

かたん、と音がして振り向けば、眠っている筈の長男・<sup>かなで</sup>奏の姿が亜夢の目に映った。

「あ、ごめん。起こしちゃった？」

慌てて駆け寄れば、奏は亜夢の目元に気づいたように、ふう、と息を吐く。

「……泣いてたの？」

よもや、小学3年の息子に覚られてしまうなんて。ぱっ、と亜夢は自分の目元に手を当てる。

「別にいいよ、隠さなくたって。お母さん、案外泣き虫だから」

「な、泣いてなんか……」

気恥ずかしくなって、亜夢は奏から目を背ける。こういうところは、本当にイクトの血

を受け継いでいると実感する。

今でも充分子供だが、もっと小さい内から、奏は亜夢の一喜一憂に左右される子供だった。亜夢が嬉しいときにはもちろん一緒に喜び、そして悲しいときには、一緒に泣いて。そういう状況の亜夢を、すぐに発見してくれて。幾斗の代わりに務めてくれているのかもしれない、と亜夢は何度も思った。

「お父さん、きっともうすぐ帰って来るよ」

「……うん」

微笑んでそう言う奏の表情は、幾斗そのもので。亜夢の心は、すごく癒されるのだった。



「お母さん、お母さんっ」

ドンドンっ、と寝室のドアが響く。はっ、と目を覚まし、亜夢はドアを開けた。

「どうしたの？」

「俺、学校行ってくるから」

「え？」

くる、と後ろを振り向いて壁の時計を見れば、亜夢は顔は一瞬で蒼く染まる。

「じゃ」

身を翻して歩みを進める奏に、亜夢は声をかけた。

「奏、ご飯は？」

「パン焼いて食べたよ。お母さんは、もう少しゆっくりすれば。今日、休みでしょ？目が覚めて俺がいないと心配すると思って、声かけただけだから」

「……」

玄関のドアが開いて、行ってきます、と奏の声が響いた。亜夢は、すっかり寝坊してしまったらしい。寝る前に泣いてしまったのも、きっと寝坊した要因の1つかもしれない、と言い訳を並べて、亜夢はリビングへ降りる。ちゃんと、奏は自分で使った食器まで洗っていた。しっかりした息子だ、と改めて関心する。

服を着替え、洗濯機を回してから、亜夢は冷蔵庫を開けて昨夜幾斗のために用意した夕飯を取り出す。それを電子レンジに入れて、温めてからダイニングテーブルの上に置いた。

いただきます、と手を合わせたところで、玄関のドアが開く音がした。奏が忘れ物をしたのだろう、と思い、亜夢はパタパタとスリッパを鳴らして玄関ホールに向かう。

「奏？ 忘れも……」

そこにいたのは、奏ではなく。ずっと会いたかった、愛しい夫の姿であり。

「ただいま。今日、休みだったんだ？」

「あ、……うん」

話したいことは山ほどあるはずなのに、本人を目の前にするとなぜか言葉にならない。呆然とした亜夢に笑顔を見せて、幾斗はリビングへ足を動かす。

「……朝から、随分こってりしたものを食べてんだな？」

テーブルの上に置かれた食事を見て、幾斗は亜夢に問う。

「あ、えっと。昨夜の、残り」

「え？」

「帰って来るって思ってた、から」

「……」

そう言う亜夢の表情に、幾斗は胸が締めつけられそうな思いがした。大きな掌で、ぼん、と亜夢の頭を撫でてやれば、それだけで亜夢の涙腺は緩んでしまう。

会いたかった。言葉にして幾斗の胸に飛び込めば、俺も、と返って来て背中に手を回された。

会えなかったぶんだけ、もっと幾斗を好きになっている気がする。ずっとずっと、会ってこうして触れたかった。声を、聞きたかった。機械を通しての声ではなく、生身の声を。直接、耳元で響かせてもらいたかった。

「……寂しかった？」

「はあ!？」

首筋に唇を這わせて、幾斗が問う。なんとなく、亜夢だけが寂しがっていたような口振りである。かちん、となって亜夢は幾斗から離れ、自然と流れていた涙を拭う。

「ば、バカじゃん!? そんなわけ……」

「俺は、寂しかった」

きっぱりと、幾斗は亜夢を見据えて言う。

「あむに、会えなくて」

「……」

そっと引き寄せられ、額に幾斗の唇の温もりを感じた。やっぱり、勝てない。もう、ずっと昔から。幾斗に惚れてしまった瞬間から、この先、きっと幾斗に勝てることはないだろう。

拭った先から、またも涙が溢れてくる。その涙を吸い取るように、幾斗は亜夢の目尻に唇を寄せた。

どれくらいの時間、そうしていたのかはわからない。せっかく温めた朝食は、また冷え切ってしまっていた。それでも幾斗は、亜夢が泣き止むまで、ずっと亜夢を抱き締めてくれていた。

「……次、いつ行くの？」

鼻を吸って、亜夢は問う。落ち着いて家にいられる人じゃないことは、十分に理解して

いるつもりだ。

「夕方には、出る」

「……そっか」

やっぱり、と思う。いつものことなんだから、と自分に言い聞かせてみるが、それでも乾いたはずの涙が出るのは、なぜだろう。

「転職、しようか？」

亜夢の涙に気づいて、幾斗が声をかける。

「あむにそんな表情をさせてまで、バイオリニストに執着しない」

頬に手を添えて、幾斗は亜夢を見つめる。

「ば、バカっ。夢だったんでしょ!? それなのに、簡単に辞めるとか……」

「あむ以上に大切なものなんてねえよ」

そう言い切る幾斗は。悔しいけれど、カッコいい。亜夢だけではなくて、幾斗も。亜夢と同じように、もしかしたらそれ以上に亜夢を大切に想ってくれていて。

わかっていたはずなのに、言葉にされるまで気づけなかった。いや。言葉にされて、そういう気持ちを思い出させられた。

「……やっぱりだめだよ。バイオリニストは続けて。簡単に、辞めるとか言わないで」

甘えなくなるから。最後の言葉は飲み込んで、亜夢は幾斗に伝えた。わかった、と言う代わりに、幾斗は亜夢を抱き寄せる。とくん、と幾斗の心臓の音が亜夢に伝わる。そばにいる、と実感した。

そのとき。ぐう、と亜夢のお腹が鳴って、幾斗は目を丸くした。ぷ、と嘔き出せば、亜夢は真っ赤になって幾斗に怒鳴った。

「し、仕方ないじゃん！ ご飯、まだだったんだからっ」

くく、と顔を片手で押さえて、もう片方の手で亜夢の頭を撫でる。無邪気な亜夢の笑顔に安堵しながら、しゅる、とネクタイを緩めて、幾斗はソファに腰を下ろした。

「イクトも、ご飯食べる？」

冷めた食事を電子レンジに入れて、亜夢は幾斗に問う。幾斗は立ち上がり、シャツのボタンを外しながら亜夢に近づいて、言った。

「あむが食べたい」

言葉に、亜夢の顔が一瞬にして赤く染まる。

「い、今、朝……」

「愛し合うのに、時間なんか関係ないだろ？」

そう言って亜夢を引き寄せ、幾斗は目尻に口づける。

「だめ？」

「……」

切ない目で訴えられると。亜夢は、なにも言えなくなってしまっ

断る理由なんか、なにもない。亜夢の身体も、幾斗を欲しているのがわかっていたから。



がちや、と玄関のドアを開けて、奏はいつもの靴が目に入った。父親の靴、である。帰っているのか、と奏は軽く息を吐いてリビングに足を向けた。

「あ、お帰り」

奏の姿に気づいて、亜夢が声をかける。ただいま、と返事をして、奏はランドセルを幾斗の座るソファに投げた。

「家なんて、とっくに忘れてるかと思ってた」

「言うようになったじゃねえか」

まるでケンカを売るように、奏は幾斗に言った。口元に笑みを浮かべて、幾斗は答える。

「あんまり、お母さんを悲しませるなよ」

「お前に言われるまでもない」

そんなことは、重々承知している。待っている間、どんなに亜夢が寂しい思いをしているのか。会いたい、という言葉、決して電話口では言わないように心がけているのか。痛いほど、それは伝わっている。

「なんの話？」

奏の前にオレンジジュースを置いて、亜夢が奏に笑顔を見せる。なんでもないよ、と奏が言うと、訝しげな表情をして、亜夢は台所へ姿を消した。

「ま、でも」

オレンジジュースを口に含みながら、奏が口を開く。

「お母さんが笑ってるから、いいけどね」

最近、泣いた表情しか見ていなかったから。涙を、我慢している表情しか。

「だけど」

どん、とオレンジジュースの入ったコップをテーブルの上に置いて、奏は幾斗を睨んで声を潜める。

「キスマークは、もっと見えないところにつけるよ」

「見えるところじゃないと、マーキングの意味がないだろ？」

さっき、オレンジジュースをテーブルに置いたとき。ちら、と桃色の髪の間から、首筋にほんのり色づいた朱色の痣が目にとまった。幾斗がつけたそれだとすぐにわかるほど、キレイなキスマーク。

少しだけ頬を紅潮させた奏を尻目に幾斗は立ち上がり、洗いものをしている亜夢の後ろから彼女を抱き締めた。ひゃ、と小さく叫んで、亜夢は身を縮ませる。

「奏に、<sup>きょうだい</sup>弟妹を作ってあげようか？」

「……っ」

言葉の意味を理解し、亜夢の顔は瞬時に赤く染まる。

「いらねーよ。泣き虫は、お母さんだけで十分」

「ちょ……、泣き虫じゃないっ」

真っ赤になって反論する亜夢に、呆れたように奏は笑みを漏らす。はは、と幾斗の笑い声が、家に響いた。

まったく、いつまで新婚気分にいるつもりだろう。昔から、この2人の仲睦まじさは変わらない。きっとこれから先も、変わることはないだろう。

何年離れて暮らしていても、この2人には切っても切れない絆がある。だから亜夢も待ってられるし、幾斗も安心して仕事ができるのだと思う。

目には見えない2人だけの赤い糸が、繋がっている。いつも亜夢を放っておいて泣かせてばかりいる幾斗は、正直言って許せない。でも幾斗といるときの亜夢の表情は、誰といるときよりも幸せそうで。そんな表情を見ていたら、こういう愛の形もあるのかな、と思ってしまう。

もうすぐ、幾斗はまた出かけてしまう。それを、亜夢は笑顔で見送る。そうして待っている間、また涙を我慢して生活していくのだ。

次に、幾斗と会うときまで。

帰る場所があるから■END



しゅごキャラ！二次創作  
帰る場所があるから

---

はなび

E-Mail           hanabi7220@gmail.com  
URL                <https://lycka.cocotte.jp/871/>  
Twitter            @hanabi7220

- 本書は非公式ファンブックです。原作者さま、出版社さまとは一切関係ございません。
- 本書を無断で複写、転載、転売、オークションで出品等をするのはご遠慮ください。

おうちでつくる同人誌  
<https://cweb.canon.jp/pixus/special/room/doujin/>